

現代ロシア思想における禅仏教認識

— グリゴリー・ポメラントフの禅仏教理解を中心に —

テン・ヴェニアミン

1. はじめに

グローバル化が進む今日、異文化間の対話が非常に重視されている。異文化哲学はこのようなグローバルな知的交流によって生み出された1つの例であろう。「概念」としての異文化哲学は1980年代から始まったが、異文化哲学の萌芽の動きはそれ以前にも見られる。本稿では、「鉄のカーテン」が存在した冷戦期に禅仏教思想がソ連における異文化哲学の形成過程に大きな影響を与えたことについて論じる。

この発端となった人物には、鈴木大拙（1870-1966）がいた。鈴木大拙は、日本の禅を新たな言説のパラダイムとして打ち出し、それを世界的な現象にまで展開させたことで、一流の仏教学者として名声を得た。それ以降、大拙の言説は絶大な影響力を持つようになるが、同時に、彼の提唱する「禅」に対しては様々な評価が提起され、非常に賞賛的な評価もあれば、猛烈な批判もある。確かに、「禅」に対する鈴木大拙のスタンス自体はあまりにも護教的な傾向性を持つ。その上、外国人向けに分かりやすく英語で紹介するという形をとったために、特定の部分を簡略化して説いた箇所も見られる。例えば、彼は『禅と日本文化』（1938）のなかで、曹洞宗についてあまり触れず、禅宗の主な軸として臨済宗を重視し、そのため「座禅」より「悟り」と「公案」に焦点を置いた。鈴木大拙に寄せられる批判には一理あるものもあるが、これを以てして鈴木大拙の言説を全面的に否定することは行き過ぎであろう。本来、禅仏教は断片的性格を持つがゆえに、客観的に、体系的に捉えること自体非常に難しいと言われている。したがって、鈴木大拙の禅は常に大拙自身の経験に基づいた主観的解釈であると考えなければならない。大拙の「禅」は哲学的な性格を持ち、哲学者の立場、主体性が必然的に含まれているので、我々は「純粹な禅」ではなく、鈴木大拙の哲学に直面することになる。大拙は若い頃、11年間米国に住んでいた経験があり、西洋の知的文化の影響を大いに受けた。彼の複雑な思想は実にハイブリッドであると同時に普遍性を含んでいるとも言える。もし、普遍性がまったく不在であるならば、彼の唱える「禅」は世界的な現象にまで広がらなかったであろう。

ロシアもまた例外ではなかった。ロシアの仏教学者オットー・ローゼンベルグ（1888-1919）は西洋における禅仏教研究者の先駆者の1人であった。彼は自著『仏教哲学の諸問題』（1918）において、禅仏教を簡単に紹介し、大乘仏教、大乘起信論に関する鈴木大拙の初期の英語エッセ

イについて少し言及した¹⁾。ローゼンベルグの死後、1950年代に入るまで禅仏教はロシア・ソ連学術界において再びあまりなじみのない学問領域になった。続く1950年代のソ連において、禅仏教研究のための重要な試みを成し遂げたのは、ソ連・ロシア思想家のグリゴリー・ポメランツ(1918-2013)であった。鈴木大拙の著作を中心に扱ったポメランツの1968年の著書は、ソ連学術界における最初の禅仏教研究となった。

1-1. 研究目的

本稿では、ポメランツの著書『東洋の宗教的ニヒリズムにおけるいくつかの潮流』(1968)を通じて、ソ連・ロシアにおける、鈴木大拙の禅思想に対する認識の特質を明らかにすることを目指す。なお本稿はグリゴリー・ポメランツの思想研究に関する博士論文の一部を成すものである。

グローバル化の時代の中で、世界におけるロシアの位置付けとアイデンティティが問われている知的背景において、ポメランツの思想の複合的性格(東洋的+西洋的)は人類文明が直面している様々な倫理的問題に対して、新しい思想的観点と手がかりを与える可能性を持つと思われる。しかし、ポメランツが現代ロシア思想をリードしているひとりの思想家であるというより、むしろ少数派の思想家であるという事実は、彼の思想の研究を進める上で、常に意識しなければならないことの1つである。例えば、主流の現代ロシア思想家と違い、ポメランツはロシアの霊性をめぐる問題をロシア正教的な世界観の枠組みに留まらず、さらに広い意味で解釈し、様々な宗教における霊性の問題と関連付けようとした。とりわけ、ポメランツは禅における霊性の問題にも大きな関心を寄せていた。筆者は、これまであまり研究されていないポメランツの思想が現代ロシア思想史において重要な位置を占めると考える。ロシアおよびほかのロシア語圏の国々を除けば、まだ殆ど知られてない彼の思想を検証することは、異文化哲学という枠組みの中で、大きな意味と新たなパースペクティブを提示するのではないかと考えられるからである。

1-2. 先行研究

グリゴリー・ポメランツの思想に関する先行研究の数はそれほど多くない。

1. P. ワーゲ(2014)「神を知ることは自己を知ることである(グリゴリー・ポメランツの哲学の性格)」

ポメランツと長きにわたり個人的な付き合いのあった小説家兼記者であるピーター・ワーゲは、ポメランツの哲学を「宗教と文化の間の対話の構築的な試み」として捉え、ポメランツの霊性的基盤がドストエフスキー、禅仏教とアンドレイ・ルブリョフ²⁾の『聖三位一体』にあると評価している³⁾。また彼は、ポメランツのドストエフスキー論の新しい点として、問題提起と主人公のイメージが比喩として、あるいは別のテーマの解釈として使われていることであると主張した。ポメランツの理解では、ドストエフスキーは自己経験や発見を直接的な内容を通して伝えているというよりは、自分の文体を通して伝えているというのである。ドストエフスキーの考えは、作

品の主人公の間の関係性とヒントとして表現されているという。さらにポメラントは、ドストエフスキーの作品の特徴は「対話の様式」にあると述べている。ワーゲが指摘するところによれば、このドストエフスキーの「対話の様式」はポメラントの哲学の様式と酷似しているという。

ポメラントとドストエフスキーのもう1つの共通点は、イエス・キリストのイメージの理解である。ポメラントは、ドストエフスキーの信条は次の言葉にあると考えた——「もし、誰かが私に、イエスが真理の外にいと証明したならば、そして実際、本当に真理がイエスの外にあるとするならば、私は真理と一緒に居たくない。私はイエスと一緒に居たい」。すなわち、この逆説的な言葉を通してポメラントは、人格者が常に観念、原則を超えているという深い哲学的意義を見ている。また、人格者が観念を受け入れるかどうかに関係なく、観念に基づいて人格を裁いてはいけないのであって、逆に、イエスという超人格者を軸にして、観念と原則を裁くべきであると解釈している、とワーゲは指摘する。

ドストエフスキーの小説には深淵へと導く未解決の問題がある。その深淵は複数の問いを超える真理へ導くことができるという。しかし、ここでワーゲはポメラントの「深淵」思想を分析していない。そのため、深淵をあくまで比喩として理解しているだけだという印象が残る。

ポメラントは禅仏教において、現在と具体的な物の絶対的意義への傾倒と哲学的体系化への拒否が存在していると気づいた。また、ワーゲの考えでは、ポメラントは座禅と公案の大きな差を見出さなかったという。さらに、ポメラントは禅とキリスト教的な神秘主義との関係性を指摘した。ポメラントは禅と出会うことによって、自己を内面的に眺める実力を養い、自らの言葉を磨く原動力を得た。ポメラントの思想の主な特徴は逆説的な仕方で様々な問題の核心を掴むことである。

アンドレイ・ルブリョフの『三位一体』は、静かに座っている三人の天使が描かれているアイコンである。ポメラントの思想において、このアイコンはただ、ギリシャ哲学、キリスト教、ユダヤ教とイスラム教との「出会い」ではなく、別の宗教（彼の場合—仏教）への開かれた「窓」になっている。彼は仏教的イメージがキリスト教的アイコンに影響を与えていたという考えを持っていたあるロシアのアイコン画の専門家に賛同していた。すなわち、ルブリョフのアイコンは一神教の出会いの場だけではなく、キリスト教と仏教を統合しようとした初期のマニ教とヒンドゥー教との接点でもある。ポメラント自身は特定の宗教に所属していないが、深く宗教的な人間であったといえる。ワーゲによれば、ルブリョフの『三位一体』はポメラントの宗教観を最もよく表現したものである。なぜなら、このアイコンは全ての宗教を包括し、各個人にイメージ的、道徳的な呼びかけとして現れるからである。

2. Y. シェミヤキン (2014) 「比較歴史的観点からみたスプエクメナと境界的文明」

歴史家であり、文化学研究者でもあるヤコブ・シェミヤキンは、ポメラントが打ち出した文明論（スプエクメナ論⁴⁾）を参照しながら、その理論の限界を指摘し、独自の境界的文明論を打ち出し、言語、テキスト、活字という3つの観点から分析を行った⁵⁾。シェミヤキンは、ポメラントの「スプエクメナ論」の論証には説得力があると述べているが、この理論では世界史の過程の

中に存在する文化・歴史的一体性を説明できないところがあるという。例えば、ビザンティン帝国とロシアである。ポメラントツによれば、ロシアは3つのスプエクメナの交差点に形成されているため、ロシア自身はスプエクメナではないのである。ロシアの文明的な位相は、玉ねぎのような「多重的一体性」である。シェミヤキンはスプエクメナ論の限界を指摘した上で、ロシアのような特殊な一体性を説明するために、「境界的文明」という概念を導入した。

スプエクメナの場合、統一の原則は多様性の原則よりも支配的である。ただし、統一の原則や、団結的、文化宗教的な存在は、単一性を意味している訳ではない。また、スプエクメナにおいて精神価値的中核は全てを貫き、文明の要素の全てを統合するのである。それとは異なり、「境界的文明」の場合、多様性の原則は統一の原則より支配的である。また、境界的文明において、精神価値的中核のようなものは存在しないのである。シェミヤキンはポメラントツが文明の文化形成の要因として問題提起した言語、テキスト、活字を再び考察し、ポメラントツの文明論を部分的に批判したが、実際のところシェミヤキンの理論はスプエクメナ論に依存する形になっていると言える。

以上のように、ポメラントツに関する研究は数少ないが、ワーゲとシェミヤキンの研究はポメラントツの思想を理解する上で重要な位置を占めると思われる。さらに、シェミヤキンの著書は、ポメラントツの文明論を分析し、その思想を新しく解釈したという点では、貴重な研究である。このことを踏まえた上で、ポメラントツの世界観と思想の考察が今後必要になるであろう。

2. グリゴリー・ポメラントツ (1918-2013) の紹介

ソ連・ロシアの思想家、文化学者であるグリゴリー・ソロモノヴィチ・ポメラントツ (Григорий Соломонович Померанц) は1918年にリトアニア共和国のヴィルノ (現在、ヴィリニユス) でユダヤ人の家庭に生まれた。家族は1925年にモスクワへ移住した。ポメラントツは1940年にモスクワ大学文学部ロシア文学科を卒業した。当初、進学するつもりだったが、彼のドストエフスキーに関する卒業論文は「反マルクス主義的だ」と厳しく批判され、進学が許されなかった。2年後、ポメラントツは第2次世界大戦に赤軍の歩兵として参加した。彼は戦場で銃弾を受けて足にひどい傷を負い、師団の新聞に記者としての仕事を割り当てられた。第2次世界大戦後には、赤い星賞がポメラントツに与えられた。1946年には反共産党的な発言のため、共産党から除名された。1949年には反ソビエト運動のために逮捕され、懲役5年の刑を受けることになったが、1953年のスターリンの死に伴う恩赦により解放された。共産党により、彼は高等教育機関で教えることを禁止された。そのため、ポメラントツは1953年から1956年までソ連南西部 (現在のロシア南西部) にあるクラスノダール地方の村で教師として働いていた。1956年にモスクワに帰り、書誌学者としてソビエト連邦科学アカデミー基礎社会科学図書館 (現在のロシア科学アカデミー社会科学の科学情報研究所 INION) で働いた。

1956年のハンガリー動乱とボリス・パステルナーク (1890-1960) のノーベル賞受賞に対する

迫害に影響され、ポメラントは能動的な反体制の立場をとった。そして1959年から1960年にかけて、哲学、歴史、政治、経済をめぐる問題についてセミナーを行った。この2年間で、ポメラントは他の反体制派のリーダーと親密な関係を持つようになった。

1963年12月3日にモスクワ国立大学哲学部におけるスピーチでスターリン主義を公然と非難した。このスピーチは大きな反響をよび、後に反体制派のサミズダート（地下出版）の主要な雑誌に掲載された。1968年には、チェコスロバキアにソ連の軍隊を介入させることに反対する「赤の広場デモ」の参加者を応援するため、嘆願書に署名した。その結果、禅宗に関する彼の博士論文がソビエト連邦アカデミー東洋諸民族研究所へ提出されることが禁止された。

中国とインドの精神的な伝統に関連する学術論文以外にも、彼は歴史的、社会的な問題に関するエッセイを書き始めた。彼のエッセイはソ連での出版が禁止されたが、海外の反体制派雑誌『コンチネント』、『シンタクシス』などに何度も掲載された。そして1972年にはフランクフルトで『出版されなかったもの』というエッセイ集が出版された⁶⁾。

ポメラントの政治、社会に関する記事と公の活動はソ連国家保安委員会（KGB）からも注目されるようになった。1984年にはKGBが正式に、海外の出版との関係について彼に警告した。その結果、1985年に、ポメラントの部屋はソ連国家保安委員会員により搜索され、彼の著作物は没収された。

ポメラントは思想家であり、文学理論家としても有名なミハイル・バフチン（1895-1975）とのドストエフスキーに関する対談を3回に渡って行い、バフチンから大いに影響を受けたという。また、小説家のアレクサドル・ソルジェニーツィン（1918-2008）とポメラントとの長期に渡る議論は当時のロシア知識人の間で大きな注目を集めていた。ポメラントは、ソルジェニーツィンのロシア正教原理主義とナショナリズムこそがロシアの道だという考えを強く批判し、リベラルな知識人の立場をとったのである。彼はソルジェニーツィンの考えたグローバルな不可避の問題としての「悪」に対して、本来的に永遠的、存在論的な悪の存在を否定する東洋的な概念を用いて反論したのである。

2009年に文学と表現の自由のノルウェーアカデミーより、ポメラントと彼の妻かつ詩人であるジナイダ・ミルキナは「ロシアにおける表現の自由の強化への甚大な貢献」を認められ、ビョルンソン賞（The Bjørnson Prize）を受賞した。ポメラントは2013年2月16日にモスクワで95歳で死んだ。

3. 『東洋の宗教的二ヒリズムにおけるいくつかの潮流』（1968）の経緯

ポメラントは1950年代に東洋思想（特に、禅仏教）に対する学問的関心を持ち始めた。彼は、このテーマで学術論文を書こうとした動機は2つあると述べている。1つ目は基礎社会科学図書館の東洋部門で書誌学者として働いたとき、東洋学に関する文献が次々と入ってくる状況を目の当たりにしていたからであり、2つ目は1964年以降、ソビエト連邦を代表するインド学者

(A. ピアティゴルスキー、A. リトマンなど)、中国学者 (V. ルービン、E. ザヴァドゥスカヤなど)、日本学者 (N. コンラドなど) と深く、学術的な交流を持つようになったからだという。当時のソ連の社会科学、人文科学においては、イデオロギーの影響が色濃く、マルクス・レーニン主義の唯物史観と唯物弁証法の方法論が支配的だった。宗教研究の場合、正統な宗教学の代わりに「科学的無神論」(Научный атеизм) という新しい学問分野が導入された⁷⁾。もちろん、このような圧迫された環境の中でも、科学的無神論者の支配を脱した重要で内容豊富な研究も産出されていた。例えば、ソ連の東洋学者 (特に仏教学者) の場合、彼らの学問領域の高い専門性、複数言語の習得などが要求されていたために、科学的無神論者たちがいくら猛烈に批判しても、実際は彼らの学問領域に立ち入りできなかったので、東洋学者は相対的に自治を守ることができたと思われる。1960年代に、著名なロシア文学の研究者であるユーリ・ロトマン (1922-1993) により、タルトゥ・モスクワ記号論スクールが創始され、言語学の領域だけではなく、多くの学問分野にまたがる記号論的アプローチが注目されるようになった。その結果、イデオロギーから離れて宗教を研究するために、記号論的アプローチ (семиотика) は科学的無神論に対してほぼ唯一のオルタナティブとなっていった。

ポメランツは、1968年に『東洋の宗教的ニヒリズムにおけるいくつかの潮流』(“Некоторые течения восточного религиозного нигилизма”) という題目の博士論文をソビエト連邦アカデミー東洋諸民族研究所 (現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所) に提出した。これは当時のソ連学術界における禅仏教に関する最初の学術的研究であったが、公聴会の直前になって突如ポメランツの発表が中止された。その理由は1968年のチェコスロバキアにソ連の軍隊を介入させることに反対する「赤の広場デモ」の参加者の嘆願書に、ポメランツが署名したからであった。これにより、ポメランツの博士論文の提出は禁止されることになった。この論文は、後の2015年に著作として出版されることになる。

この論文のテーマは、20世紀にアメリカと西ヨーロッパに浸透してきた東洋の宗教的教義に関するものである。具体的には、研究対象として禅仏教とジッドゥ・クリシュナムルティの思想が扱われている⁸⁾。また、禅に関する文献は鈴木大拙のエッセイが主に取り上げられている。

4. 鈴木大拙の禅に対する捉え方とその特徴

ポメランツは禅仏教を研究する方法論としてロシア記号論のアプローチを採用した。すでに知られているように、記号論において、宗教はコミュニケーション・システム、つまりある種の「言語」として捉えられ、そのシステムの内容と伝達方法の可能性の分析を目指す。マクロかつ抽象的な観点に立つ記号論は、研究対象の具体性から離れがちに見えるが、実はこのスタンスにより、問題の原因と本質をより深く理解するための広い視野が提供されるとN. メチコフスカヤは述べる。具体的には、記号論的なアプローチの認識上の価値は以下の点にある。

1つ目は、対象の機能的な側面が考慮される。即ち、コミュニケーションの目的が解明される。

2つ目は、各々の記号論の対象には内容の観点と表現の観点に差があるとされる。3つ目は、各々の記号論的システムにおいて、2つの存在論的次元が異なるとされる。前者の存在論的次元は記号論的可能性の全体である。後者は具体的なコミュニケーション行為における可能性の実現である。コミュニケーションの過程において、言語学における *langue* と *parole* の関係のように、記号論的な全体を構成する一般的な可能性は具体的なコミュニケーション行為を通して、具体化される。

宗教の場合、宗教の内容あるいは神話宗教的意識は様々な心理的・認識的性格を持ついくつかの構成部分を含んでいる。1つ目は心信仰であり、信憑性あるいは確証性の程度と関係なく、また疑いに反するとしても、ある情報を受け入れ、従うことである。2つ目は神話的・詩的（または視覚・イメージ的）内容である。3つ目は理論的構成部分である。4つ目は直感・神秘主義的内容である⁹⁾。

4-1. 「宗教的ニヒリズム」としての禅

ポメラントは『東洋の宗教的ニヒリズムにおけるいくつかの潮流』で禅仏教とジッドゥ・クリシュナムルティの思想を「宗教的ニヒリズム」として捉え、西洋の宗教伝統と異なり、神（その他の絶対的なもの）の崇拜、個人の永遠の生命への希望は存在しないと考えていた。このことに関してポメラントは次のように説明している。

これは神秘主義的な教えである。教えの中心となるのは脱客体化された一体感を体験することである。主体と客体、善と悪の対立の解除である¹⁰⁾。

更に、この思想の宗教的基準は「否定」あるいは「記号の不在」あるいは「矛盾」であると述べる。ポメラントはこれを「無記号主義」、または「宗教的ニヒリズム」と名付けた。例えば、無記号主義的な傾向はウパニシャッド、仏教、ヴェーダーンタ、道家思想に見られる。西洋の中世（ディオニシウス・アレオパギタの否定神学、マイスター・エックハルトの神秘主義）と中東（スーフィズム）においてもこの傾向があると、彼は考えた。

ポメラントは禅の特質を以下のように分類している。

- 1) 神聖な象徴に対する虚無的な態度（例：仏と会った場合、仏を殺さなければならない）
- 2) 学識に対する懐疑的かつニヒリスティックな態度（不立文字）
- 3) 伝統的実践の形式に対するニヒリスティックな態度
- 4) 一般的なカテゴリーと価値観の知性的定義への拒否
- 5) 真理は自然に流れ込んでいる
- 6) 真理を直接的に語ってはいけない。ヒントを与えることのみ
- 7) 自己と世界の一体化を経験することが最も重要である
- 8) 日常生活、日常労働において一瞬の快感を探ること（日本の禅の場合、戦いの中でも）

4-2. 宗教、論理学、不条理

ポメラントは、自身の論文の第1章¹¹⁾において、禅仏教の歴史と思想を紹介し、第3章では禅仏教の言語の特徴として不条理、非論理性、逆説が非常に特殊な役割を果たしていると指摘し、抽象論理的に分析を行っている。

当時のソ連では、宗教＝不条理であるという科学無神論的言説が強かったため、ポメラントはこのような言説の問題性を鋭く指摘した。宗教にも非合理的な面がもちろん存在するが、同時に、論理的思考に背反するわけではない。形式論理学の発展とともに、宗教も発展してきたという歴史的事実もある。また、宗教の神聖な不条理には、明確な世俗の意味が含まれ、それは転換期の歴史的な複雑さであると見ることもできる。したがって、「不条理な伝達」はどのような意味的負荷を持つかという問いを深く考察する必要があるとポメラントは述べている。論理学の立場からみると、不条理は論理的誤謬である。ここで、ポメラントは論理学と不条理の複雑な関係性を分析するために記号論の「意味の核」と「意味野」という概念を適用した。不条理の意味は、理性が現実から離れた逸脱としての間違いを示してくれることにある。例えば、数学は理性＝現実という仮定に基づいている。しかし、生はもっと複雑なのであり、歴史的現実を見れば、言葉の関係だけではなく、物との関係さえ不条理になる。ある時代から別の時代への過渡期を見れば、不条理な状況が起こることは不思議ではない。この場合、非連続的なものを連続させる不条理な伝達によって、生が我々の考えの枠組みを超えるものと示唆してくれるのである。即ち、常識のレベルで意味のない不条理な伝達は、深層レベルで現実と一致することが可能である。また、その困難な状況を象徴的に描写することもできる。逆に、常識的意味は不条理な状態の場合、問題の本質を掴まなまま、表層レベルで止まってしまう。不条理な伝達はいつも理性の誤謬を導く訳ではない。不条理の伝達を通して生き生きとしている理性は、自分の論理の限界と不条理に気付くのである¹²⁾。

ポメラントはこの不条理な伝達を2つに分類する。

(1) 2つのシステムの混乱性

このシステムは別々の体系であり、それぞれが自分なりの論理的構造を認める。

(2) 意味野の混乱性

論理的構造の共有を認める。その場合、「文脈的思考」を必要とする。

厳密に言えば、(1)は不条理に見えるが、実は逆説的であるとポメラントは指摘する。つまり、形式論理的思考が自分の仮定、柔軟な操作のルール等を変更することによって、論理性を掴むことができるという。これは既存の論理的枠を出ることが要求される条件付きの不条理の状況だといえよう。(2)は完全に、または本当の意味の不条理の状況である。形式的思考の領域においては決して解決できないものである。禅の公案と問答は(2)に属するとポメラントは捉えている。このことを証明するには様々な不条理の伝達を比較する必要性が生じる。また、(2)のグロテスクな言葉は歴史的、存在的無の真空状態には絶対に起こりえないとする。

文脈における不条理な伝達は理性的な言葉と同じく、様々な意味を持つ。不条理は理性の外部

にあるものではない。理性と不条理はお互いに絡み合っている。理性的形式の発展は不条理な形式の発展と不可分の関係にある。

不条理な伝達は新しい思考システムにおいて、新しい意味を持つ。各々の思考システムの適切な意味の束としての不条理を基準にすることによって、様々な思考システムを区別できるようになる。例えば、形式的思考の場合、意味の束は直線になる。文脈的思考の場合、束は扇型になる。形式的思考の枠組みにおいて、不条理は仮定と操作ルールに反する術語の関係性に確定されることが可能である。この関係性はふつう禁止されるが、大変重要な役割を果たす。不条理とは形式的思考の境界である¹³⁾。

次に、不条理への理解を深めるために、科学的弁証法と仏教的弁証法を比較することが有効だろうとポメラントツは指摘する。科学的弁証法における不条理は「ある確定されたもの」から「他の確定されたもの」への推移の記号である。だが佐々木によれば、仏教的弁証法における不条理は「ある決定論的なもの」から「非決定論的なもの」への推移の記号なのである¹⁴⁾。弁証法の場合、我々はある現象（意味の中核が厳密に定められたもの）から他の現象へ移動する。ヘーゲルの弁証法はメタ観念（精神）、メタシステムを構築するために観念からアンチ観念へ、システムからアンチシステムへ進んでいる。メタシステムを構築することによって、不条理を解除しようとする。しかし、一番高いレベルで1つのものは2つになる。これは高度な不条理であると言える。結局、我々は差異のレベルに残り、原子の状態の側面から原子的事実の集合体としての現実を見ている。この現実はお互いに繋がっているし、変化して行くが、「非事実」としての一体への推移は絶対に許されていない。

ポメラントツによれば、仏教からみると、このような進み方、進歩は全く意味を持たないのである。なぜなら、この進歩は決定論の領域から一歩も踏み出さないからである。メタシステムは一時的に矛盾を回避することができるが、一時的な成功は無限の前に何の価値を持たない。確かにメタシステムは実践的経験を整理するが、仏教においてはこの経験を捨てなければならない。差異のレベルの中に推移があったとしても、これは正に輪廻そのものであろう。仏教は同一性のレベル（＝般若）だけを認める。般若への道はヘーゲルの世界精神と違って、カテゴリーの階段を段々と登ることができない。本来近づくことさえ不可能である。

仏教の場合、全ての現象は廃止され、「空虚」の中で消えなければならない。我々は差異のレベルから同一性のレベルへ飛躍する。即ち、現実論的分析では解けない一体的観察として捉えられる¹⁵⁾。

ポメラントツは通時的に1つの全体像としての仏教を描写するために、禅の不条理性という問題に近づこうとした。彼の考えでは、禅は文化的なシステムの外に、神聖的と世俗的なもの間に成立するという。禅は高度な整合的文化のシステムであり、他の文化システムと通時的＝系統のおよび共時的＝相互作用的に繋がっているのである。系統的に見たとき、禅は仏教というシステムのサブシステムとして捉えられる。しかし、禅についてさらに知ることによって、神聖的な書物にあまり関心を持たない禅のユニークな性格が見えてくる。その上、他の仏教宗派と違って、

禅においては労働という日常生活が物への一番近い道をとることになり、極端な合理性へ導く。禅はインドの大乗仏教より非論理的性格を持つと同時に、より論理的である。この二重性はどこから来たものだろうか。ポメラントはこの謎を解くために、原始的文化の残存構造と民俗学的伝統を考慮する必要があると述べる。

4-3. 不条理と原始的文化

第4章において、ポメラントは禅仏教の視覚・イメージ的内容と不条理との関係性について論じている。すでに、第3章において宗教の抽象論理的構成部分について触れた。宗教思想の歴史的発展が進むにつれ、抽象論理学の構成部分だけではなく視覚・イメージ的要素も発展した。この2つの構成部分の対話には温度差があったにもかかわらず、対話は持続されていた¹⁶⁾。

視覚・イメージ的な思考における不条理は滑稽と連続している。滑稽は未完成であり、未形成であるために、笑いと恐怖という2つのニュアンスを含む。この両義性は分離されずに、儀式のゲームで混同される。原始的文化のグロテスクの記号的システムにおいてこの2つの極端性は1つのルーツから成長する。例えば、アフリカとオセアニアの仮面は急速に移り変わるゲームの顔であり、ダンスの身ぶりである。原始的儀式的行いにおいて、微かな気持ちの変化により、悲劇と喜劇、ミステリー、崇拜と滑稽なカーニバル等の要素が表に出るが、結局、聖俗が分離されずに、曖昧な形で多様な要素が見られる。したがって、原始的文化におけるこのような記号的システムは1つのシステムの多数の位格としての役割を果たす。これに対して、バフチンは次のように論ずる。

世界と人生の理解の二重的側面は文化発展の初期段階に存在した。原始的民俗は真面目な（組織性、緊張感）儀式と同時に神を毀損し、虐げる滑稽な儀式も存在した…しかし、初期の段階において階級と国家体制以前には、神、世界と人間に対する真面目で滑稽な側面は恐らく同じように神聖なものとして見られただろう。（Бахтин 1965: 8-9）¹⁷⁾

本来人間の生き生きとしている意識においては、内面的な対話性があるとポメラントが言及する。以下の図に2つの思考の対話性が見られる。

論理概念的	神話詩的
形式的・科学的	民俗学的
論理図式的	詩連想的
数学的	文脈的
平日的・業務的	休日的・祝日的

図 人間の意識における思考の対話性

ポメラントは「世界の理解の二重的側面」は本来二重的だったと仮定する。この二重性において現代的な思考では理解できない何らかの価値が隠されており、ポメラントは禅がこの価値を連想させるという。この二重性という問題に近づくために、1つの障害を乗り越えなければならない。ただし、禅はテキストに対して懐疑的な態度をとるが、原始的文化はもともとテキストの集合としては理解できないと思われる。なぜなら、原始的言語はあまり発達していないため、言葉で経験した一体感のイメージを伝えることができないからである。

全体のイメージは儀式的ダンス、ゲームとなる。踊りながら、動きながら、手ぶりとポーズのシステムの中で原始的人間は世界の地図を作る。

中国において、仏教的合理主義は他の民俗学的な基体と対話し、変遷するようになった。ポメラントの考えでは、禅の特徴は初期の段階（原始的文化）に保存された記憶を連想させるものとして説明ができる¹⁸⁾。その例として、不立文字、日常と労働と神聖な黙想の交代、素早いゲーム、神聖な笑いが取り上げられる。

5. おわりに

以上、本稿では、グリゴリー・ポメラントの『東洋の宗教的ニヒリズムにおける幾つかの潮流』（1968）を通して、禅仏教の言説がいかにソ連・ロシアで受容され、いかなる認識の特徴を持ったかを分析した。

ポメラントは1968年のこの博士論文において、禅仏教を対象にロシア記号論の方法論を適用した。その結果、宗教的記号論は単なるソ連の科学無神論的な方法論の1つのオルタナティブだけでなく、客観的な宗教学における補足的なアプローチとなりうることが明らかになった。具体的には、鈴木大拙の禅哲学から抽象論理的構成部分と視覚・イメージの構成部分が抽出されることによって、禅仏教において重要な宗教的ニヒリズムの要素である不条理が明確にされた。また、禅仏教と原始的文化との二重的意識の考察は大変独創的なものであるとも言える。今後は禅と原始仏教とのさらなる比較研究が求められる。

本稿では、鈴木大拙の禅の言説がソ連・ロシアにおける初期禅仏教研究に強い影響を与えたこと、そして鈴木大拙とグリゴリー・ポメラントの2人の思想家の間に、こうした「知的交流」がなされたことが明らかになった。

註

- 1) 具体的に、ローゼンベルグは『仏教哲学の諸問題』の「日本及び中国に於ける仏教研究」において大拙と彼の著書について、以下のように述べている。「鈴木氏はその大乘仏教綱要の中で、既にあらわになって来た護教的な傾向を持ちながらも直接ヨーロッパの出版界に訴えている。著者は英語教師であり、神秘的瞑想たる日本の禅宗と関連を持っている。その禅宗たるや、厳密に言って、文献的伝

統を投げ捨てており、従って、存在が持続している間、他の諸宗派——それはたとえ、非体系的、非学問的であっても文献とスコラ学との関連を正当に維持している諸宗派——の側から多くの避難をあげていたものである。鈴木氏の書物はその欠陥と不充分さにも拘わらず、きわめて興味がある。というのは、それは仏教に興味を持っている教養ある多くの日本人の取る立場を代表しているからである。ただ、大乘仏教綱要は日本の伝統の権威ある叙述と見ることだけは許されない。この書物はインド学者から屢々論難せられた。しかし、批判は同時に、日本の伝統すべてに関わっていた——しかし日本の伝統は絶対にそれに相当したものではなかったけれども——」(ローゼンベルグ 1976: 42)

- 2) アンドレイ・ルブリョフ (1360-1430) はロシアのイコン画家。生涯については不詳。1390年代半ば頃までザゴールスク (現セルギエフ・ポサド) の聖セルゲーイ大修道院でイコン画家として修行、その後モスクワのアンドロニコフ修道院 (現アンドレイ・ルブリョフ美術館) で過ごした。ギリシア人のイコン画家フェオファン・グレクとも何らかの形で接触し、影響を受けたと推定される。ヘシカズムの流れを汲むルブリョフのイコンはその独特の色彩を通して、神の神秘の深みへと見る者を誘い、その精神性において最高の境地に達している。作品はモスクワのブラゴヴェシチェンスキイ聖堂のイコノスタシス、ウラジーミルのウスペンスキイおよび「聖三位一体」など。(『岩波 哲学・思想辞典』により)
- 3) Воге, П.Н., 2014. «Богопознание как самопознание (Штрихи философии Григория Померанца)». *Общественные науки и современность*, 2, 98-112
- 4) スブエクメナ (Субэкумена) とは、同じ宗教哲学的伝統に貫かれている安定的な文化の連合である。今日、このようなスブエクメナは4つの世界から成ると考えられる。キリスト教的世界、イスラム教的世界、南アジアのヒンドゥー教仏教的世界、東アジアの仏教儒教的世界である。(Померанц 1972: 245-267)
- 5) Шемякин, Я.Г., 2014. «Субэкумены и “пограничные” цивилизации в сравнительно-исторической перспективе: о характере соотношения Языка, Текста и Шрифта». *Общественные науки и современность* 2, 113-123.
- 6) Померанц, Г.С., 2012. *Записки гадкого утенка*. Центр гуманитарных инициатив, с. 222
- 7) 当時のソ連における宗教研究に関する状況についてはシャフノーヴィチの研究がある。(Shakhnovich, Marrian M. 1993. “The study of religion in the Soviet Union”. — *Numen. International review for the history of religions* 40(1), 67-81)
- 8) 本稿では禅仏教の説明のみを取り上げる。
- 9) Мечковская Н.Б., 1998. *Язык и религия*. Гранд, с. 26
- 10) Померанц Г.С., 2015. *Некоторые течения восточного религиозного нигилизма*. Права Людини, с. 6
- 11) ポメランツは第2章においてジッドウ・クリシュナムルティの伝記と彼の思想を紹介した。本稿では禅仏教の説明のみを取り上げる。
- 12) Померанц Г.С., 2015. *Некоторые течения восточного религиозного нигилизма*. Права Людини, с. 195
- 13) Померанц Г.С., 2015. *Некоторые течения восточного религиозного нигилизма*. Права Людини, с. 200-204
- 14) Sasaki, Genjun H. 1963. “The historical evolution of the concept of negation”. — *Journal of the American Oriental society* 83(4), p. 484
- 15) Померанц Г.С., 2015. *Некоторые течения восточного религиозного нигилизма*. Права Людини, с. 208-209
- 16) Померанц Г.С., 2015. *Некоторые течения восточного религиозного нигилизма*. Права Людини, с. 216
- 17) Бахтин М.М. Творчество Франсуа Рабле. М., 1965, с. 8-9.

- 18) Померанц Г.С., 2015. *Некоторые течения восточного религиозного нигилизма*. Права Людини, с. 235-236

参考文献

一次文献：

- Померанц, Г.С., 2013. *Дороги духа и зигзаги истории*. Центр гуманитарных инициатив.
 Померанц, Г.С., 2012. *Записки гадкого утенка*. Центр гуманитарных инициатив.
 Померанц Г.С., 2015. *Некоторые течения восточного религиозного нигилизма*. Права Людини.
 Померанц Г.С., 1972. *Неопубликованное*. Посев.
 Померанц, Г.С., 1990. *Открытость бездне. Встречи с Достоевским*. Советский писатель.
 Померанц, Г.С., 1998. *Страстная односторонность и бесстрастие духа*. Университетская книга.

二次文献：

論文

- Вогe, П.Н., 2014. «Богопознание как самопознание (Штрихи философии Григория Померанца)». *Общественные науки и современность* 2, 98–112
 Шемякин, Я.Г., 2014. «Субэкумены и “пограничные” цивилизации в сравнительно-исторической перспективе: о характере соотношения Языка, Текста и Шрифта». *Общественные науки и современность* 2, 113–123
 Sasaki, Genjun H. 1963. “The historical evolution of the concept of negation”. – *Journal of the American Oriental society* 83(4), 477–484
 Shakhnovich, Marrison M. 1993. “The study of religion in the Soviet Union”. — *Numen. International review for the history of religions* 40(1), 67–81

単行本

- 鈴木大拙 (2013) 『禅と日本文化』岩波新書
 鈴木大拙 (2014) 『日本の靈性』角川ソフィア文庫
 Suzuki D.T., 1927. *Essays in Zen Buddhism (First series)*. The Eastern Buddhist Society.
 Suzuki D.T., 1933. *Essays in Zen Buddhism (Second series)*. The Eastern Buddhist Society.
 Suzuki D.T., 1934. *Essays in Zen Buddhism (Third series)*. The Eastern Buddhist Society.
 Suzuki D.T., 1949. *An introduction to Zen Buddhism*. The philosophical library.
 Бахтин М.М., 1965. *Творчество Франсуа Рабле*. Москва.
 Мечковская Н.Б., 1998. *Язык и религия*. Гранд.
 О. ローゼンベルグ著、佐々木現順訳 (1976) 『仏教哲学の諸問題』清水弘文堂

辞典

- 廣松渉、子安信邦等編集 (2006) 『岩波 哲学・思想辞典』岩波書店